細川桃庵の事跡

関　信之、小曽戸　洋

和刻本医書の官刻本はさほど多くないが、そのうちの一つ、享保十七年（一七三三）刊の『太平恵民和剤局方』には校正者として橘親顕（今大路玄耆）・細川桃庵・望月三英・丹羽正伯の四名の官医が名を連ねている。このうち細川桃庵を除く三名については従来研究があるが、ひとり細川氏については官医の名家でありながら、これまで調査報告がない。演者らはこのたび官医細川氏の事跡およびその墓地を調査し、新知見を得たので報告する。

細川氏は『寛政重修諸家譜』によれば讃岐守細川詮春を祖とし、豊臣・徳川両家にも仕えた名家であり、坂上池院宗説の二男でその十代目を継いだ元隆が医の始めである。元隆の養子となった細川某（一六四八～一七二三）が初代桃庵を名乗った。

初代桃庵は貞享四年、将軍綱吉に謁見し、同年細川家を継ぎ、元禄三年番医、同四年奥医に進み、享保七年法眼に叙せられた。享保八年七月二十九日没。

二代目桃庵（一六九九～一七六一）は名を元信といい、黒川氏より養子に入り、享保四年、将軍吉宗に謁見、同八年家督を継いだ。同十四年に番医となり、享保十七年には官命を承けて校刊した『太平恵民和剤局方』の校正者として名を残している。宝暦十一年没。

三代目桃庵は元信の実子で、名を光信といい、寛延元年、将軍家重に謁見し、宝暦十一年元信の没によりその跡を継ぎ、安永二年七月二十五日没した。享年四十七。

四代目細川某は明和七年将軍家治に謁見し、安永二年光信の没後細川家の家督を継いだが、博打などの罪により遠流となって家系が絶えたと記されている。

藤浪和子の編になる『東京掃苔録』（昭和十五年）には、臨済宗妙心寺派の曹渓寺（東京都港区南麻布二ノ九ノ二）に細川桃庵（享保八年七月二十九日没。年七十六。江雲院真性亦如居士）の墓があることが記されている。演者らは曹渓寺を訪ねてこれを調査した結果、次のようなことが判明した。

四代目桃庵が遠流になって家が断絶したためであろう、六年前に赴任したという現住職に尋ねたところ、壇家はいないどころか、その墓石も知らないという。そこで、昭和三十三年に合葬された無縁墓石群を調査したところ、『東京掃苔録』の記録する初代桃庵の墓石は確認できなかったが、新たに二代目、細川元信とその妻、そして三代目細川光信の墓石、計三基を確認した。これらは無縁墓地のもっとも奥に右側から並べられている。

二代桃庵の墓石の刻文は墓石が密接しているため読み取りは困難を極めた。しかし服部元雄（南郭の養子）の『蹈海集』（明和六年刊）に収録される細川元尚の墓誌とほぼ一致することが判明、したがって元尚は元信のことであり、またこの刻文は服部元雄の撰にかかることがわかった。以下『蹈海集』により補塡した刻文を記す。

「含真院為岳休心居士（以上正面）按状先生諱元信字仲説号含真本姓黒川母武田氏元禄 戊 寅歳九月二十一日生于京師少来于東都 ［　］ 細川氏以桃庵 ［　］ 六月十 七日卒年六十四葬于古川曹渓寺余応其嗣宗仙君請 ［　］ 先生墓凡先生行事異於衆者不可勝記而有言以若 ［　］（以上左面）為人取以徴之云先生嘗謂宗仙君曰爾知乃公居常居心 所 存乎家幸資県宦之俸方伎是疇不翅三世先父之職吾 豈有 弐尸其位者哉夫唯所病病道少耳自省不病道之将行也与命也且従吾所好則与其鯖五侯之膳県宦之俸衣食足矣寧退而自修養生保真典籍 足 以自娯与彼形諜成光随俗以 変 夸毘鬻伎者為伍吾不敢余上先生堂再四堂扁含真 二字 戸 牖外百囲大小森林然成列白日不通光殆有深山窮谷間 想 所（以上背面）謂養生保真不必在遠其在茲乎含真之称余亦知先生 ［　］ 所存矣遂為銘銘曰善抱者焉用其耀善全者爰得 ［　］ 服 ［　］（以上右面）。」

さらに、現住職の御高配により過去帳を被見することができた。これによると初代桃庵は法名を江雲院真性亦如居士といい、享保八年七月二十九日に没している。これは『寛政重修諸家譜』や『東京掃苔録』の記述とも一致する。二代桃庵は法名を含真院為岳休心居士といい、宝暦十一年六月十七日に六十四歳で没している。『寛政重修諸家譜』

には年六十三と記されている。三代桃庵は法名を済性院慈源道円居士といい、安永二年七月二十五日に没しており、この記述も『寛政重修諸家譜』の記述と一致する。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）

呉秀三先生遺稿について

―ことに「杏壇訪古」のこと―

岡田靖雄

呉秀三先生遺稿については、わたしの『呉秀三　その生涯と業績』（思文閣出版・京都、一九八二年）に概説してある。また、わたしが『日本医史学雑誌』第二八巻第四号（一九八二年）にのせた「東京大学医学図書館所蔵呉秀三文庫目録」および「医学文化館に寄託されている呉秀三先生遺品目録」（ともに『呉秀三先生没後五〇年記念会誌』、一九八三年、に再録）にその一部分の題名が記載されている。

先生の遺稿中で、おおきなものは二つある。その一つは『古今図書集成』、『聯斉志異』、『今昔物語』などからかきぬいた東京大学医学図書館所蔵『医聖堂叢書』で、これは『呉氏医聖堂叢書』（一九二三年）の続篇を準備されていたのだろう。もう一つが、今回報告の「杏壇訪古」である。